とやま型学力向上プログラム（Ⅲ期）の視点を踏まえた授業づくりのポイント

とやま型学力向上プログラム（Ⅲ期）R5～

とやま型学力向上プログラム（Ⅲ期）では、「問題発見・解決能力」の育成を目指し、「子供の問題（課題）意識を高める」「子供が自己調整しながら学習を進めることができるようにする」の二つの視点を基に授業改善に取り組むこととしています。どのような子供の姿を目指して授業づくりに取り組めばよいか、これまでの授業を見つめ直してみましょう。そして、学習者中心の授業づくりに向けた取組を進めていきましょう。

確かな学力

問題発見・解決能力の育成

【授業改善の視点】

視点1　子供の問題（課題）意識を高める

＜教師の手立て（例）＞
- 導入での事象の提示や学習環境の工夫
- 既習事項との違いを確認する場の工夫　等

- なぜだろう。
- 今までと違うぞ。どうしてだろう。
- できる、分かるようになりたい。もっと知りたい。

視点2　子供が自己調整しながら学習を進めることができるようにする

※自己調整：課題解決の過程で、自分の学習状況を把握し他の子供と話し合うなどして、方向性を見直したり、必要な内容等について考えたりすること　等

＜教師の手立て（例）＞
- 活動の見通しをもたせる工夫
- 情報を収集・選択し、考えをもたせる工夫
- 一人一人の問題解決に生きる対話の工夫
- 考えを分かりやすくまとめ、表現させる工夫
- 自己の活動を振り返らせたり、身に付いたことを自覚させたりする場の工夫　等

- ○○してみよう。次は△△していけばよさそうだぞ。
- ここは、まだよく分からないから調べよう。
- みんなは、どう考えたかな。聞いてみたいな。
- みんなに言いたいことが伝わるかな。
- ここまで分かったぞ。次は、□□してみよう。

- 学びに向かう力の高まり
- 自己肯定感の向上

家庭学習へのつながり

- もっと考えたい。
- あきらめないでよかった。また、がんばろう。

- もう１回やってみよう。
- 難しいかもしれないけれど、挑戦しよう。

＜問題発見・解決能力を身に付けていく子供の姿の例＞

問題発見･解決能力を身に付けていく子供の姿は、必ずしも以下の順にみられるわけではありません。学習の状況に応じて繰り返しみられたり、行き来したりすることも考えられます。

興味・関心をもつ
- 心が動く（感動、驚き等）
- 疑問を感じる

課題を見いだす
- 気付く
- ずれを感じる
- 追究したくなる問いまで高める

課題解決への見通しをもつ
- 目当てをもつ
- ゴールをイメージする
- 進め方を考える

考え、判断し、解決していく
- 自分事として捉える
- 比較、関連付ける
- 試行錯誤し、自らの学習を深める
- 考えをまとめ、伝え合う

まとめと振り返りをする
- 課題に対する学習内容をまとめる
- 学び方を振り返る
- 身に付いた力に気付く
- 新たな気付き、見通しをもつ

＜教師の具体的な手立ての例＞

目指す子供の姿に向けて単元を構想する	・子供に身に付けさせたい資質・能力の確認 ・子供の実態、教師の願い、教材の特性を意識した全体計画の作成 ・指導事項を踏まえた評価場面の位置付け
子供が課題をもつための場や環境を設定する	・引き出した問いや願いから、子供自らが追究したくなる課題づくりへの後押し ・学習への期待感を高める事象の提示や学習環境づくり
単元を通して、子供の問題（課題）解決の意識の持続・向上を図る	・授業で扱う材料や用具等の工夫、場所や時間の柔軟な設定 ・子供のつまずきを想定した複数の手立ての準備 ・既習事項との違いに気付かせる発問や板書計画づくり
子供が主体となって学び進めるための場や機会を設ける	・子供が追究に応じて選択できる、教材、方法、進め方等の工夫 ・子供が必要なときに、必要な相手と対話したり、協働したりできる場面の設定 ・収集した情報を整理・分析し、まとめ・表現する機会の充実
子供一人一人の学びの状況を把握する	・問題解決の見通しや目標への学びの状況の見取りと声かけ ・端末やノート等での子供の考えの確認
子供が成果や課題を自覚するための視点や場を設ける	・振り返る観点・視点の明確化 ・子供が次の活動の見通しをもつための振り返りの活用

各学校による主体的な学力向上の取組の推進（Ⅱ期）　ＰＤＣＡサイクル H25～R4

Ⅰ期を根底に置く

学力の向上と人間関係づくりを一体的に進める「学び合い」（Ⅰ期）H20～H24
実感を伴った理解につながる「体験」の重視

≪授業改善の視点≫
○ねらいを明確にした授業の構想　○目的を明確にした書く活動　○終末における学習成果の確認

学びの土台

幼児期から育む非認知能力※の例

自分を高める力	自分と向き合う力	他者と関わる力
意欲、好奇心、創造性等	自己肯定感、自制心、やり抜く力等	コミュニケーション力、協調性、思いやり等

※非認知能力とは、学力テスト等で数値化しにくい、内面的なスキルや特性を指します。

とやま型学力向上プログラム（Ⅲ期）の視点を踏まえた授業づくりシート

※□（チェック欄）を活用して、自分の授業を振り返り、自己理解を深めましょう。
※子供の姿を思い浮かべながら、教師の願いを明確にし、手立てを考えましょう。授業後に、自分の授業を評価し、改善を図りましょう。
※Memo 欄には、＜例＞を参考に授業づくりのアイディアや授業で行った手立てを書きためるなどすることで、自分の記録として使うこともできます。

＜問題発見・解決能力を身に付けていく子供の姿の例＞

順不同、状況に応じて繰り返したり行き来したり

興味・関心をもつ
・心が動く（感動、驚き等）
・疑問を感じる

課題を見いだす
・気付く
・ずれを感じる
・追究したくなる問いまで高める

課題解決への見通しをもつ
・目当てをもつ
・ゴールをイメージする
・進め方を考える

考え、判断し、解決していく
・自分事として捉える
・比較、関連付ける
・試行錯誤し、自らの学習を深める
・考えをまとめ、伝え合う

まとめと振り返りをする
・課題に対する学習内容をまとめる
・学び方を振り返る
・身に付いた力に気付く
・新たな気付き、見通しをもつ

教師は、子供の姿を見取り、授業改善の視点1・2を基に具体的な手立てを工夫

目指す子供の姿に向けて単元を構想する

□子供に身に付けさせたい資質・能力の確認
□子供の実態、教師の願い、教材の特性を意識した全体計画の作成
□指導事項を踏まえた評価場面の位置付け

＜例＞
子供が、学習課題を自分事として捉え、学んだことを生活に生かしていけるようにしたい
→ 単元に関連する他の教科・領域等の学習内容等を位置付けた教科等横断的な視点での単元構想
毎時間のねらいを明確にした振り返りワークシートの作成

Memo（私の工夫や手立てなど）

単元を通して子供の問題（課題）解決の意識の持続・向上を図る

□授業で扱う材料や用具等の工夫、場所や時間の柔軟な設定
□子供のつまずきを想定した複数の手立ての準備
□既習事項との違いに気付かせる発問や板書計画づくり

＜例＞
単元を通して追究し続ける共通の学習課題を子供と一緒につくり上げたい
→ １人１台端末で各自の疑問を全体共有
子供の考えをつなぐ意図的指名で、解決したいことを明確化

Memo（私の工夫や手立てなど）

子供一人一人の学びの状況を把握する

□問題解決の見通しがもてているかの見取りと声かけ
□端末やノート等での子供の考えの確認
□子供が付けたい力に向かっているかの状況把握

＜例＞
子供が課題を解決するために、個に応じた手立てを講じたい
→ １人１台端末で子供の思考の流れの確認と学びの見取り
学びの進捗状況に応じた声かけ

Memo（私の工夫や手立てなど）

子供が課題をもつための場や環境を設定する

□引き出した問いや願いから、子供自らが追究したくなる課題づくりへの後押し
□学習への期待感を高める事象の提示や学習環境づくり

＜例＞
子供の興味・関心や課題意識を高め、どうしてだろうという疑問と、自ら解決したいという思いをもてるようにしたい
→ 既習事項とのずれを感じたり、自分の考えと友達の考えを比較したりするなど、疑問や気付きを生み出す発問や事象の提示
予想や仮説を引き出す問いかけ

Memo（私の工夫や手立てなど）

子供が主体となって学び進めるための場や機会を設ける

□子供が追究に応じて選択できる、教材、方法、進め方等の工夫
□子供が必要なときに、必要な相手と対話したり、協働したりできる場面の設定
□収集した情報を整理・分析し、まとめ・表現する機会の充実

＜例＞
子供が自分の考えをもち、自分に合った学び方で学習することができるようにしたい
→ 班で交流したり、友達に聞きに行ったり、教師と一緒に考えたりするなど、自由に選択しながら学び進める柔軟な授業展開
必要に応じて活用できるヒントカードや写真、資料掲示等の準備

Memo（私の工夫や手立てなど）

子供が成果や課題を自覚できるよう、動機付ける

□振り返る観点・視点の明確化
□子供が次の活動の見通しをもてるような振り返りの活用

＜例＞
自分の学びの深まりを実感し、他の子供の振り返りから新たな考えに気付くことができるようにしたい
→ １人１台端末に入力した「学習課題に対するまとめ」と「学び方についての振り返り」の全体共有、学びの価値付け
学びの質を振り返るよう習慣化

Memo（私の工夫や手立てなど）